

地域特性をふまえた若者支援の研究：愛媛県東予地域を事例に

研究代表者 広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授 尾川 満宏*

Ogawa Mitsuhiro

共同研究者 神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 准教授 知念 涉

Chinen Ayumu

岡山県立大学保健福祉学部 講師 都島 梨紗

Tsushima Risa

研究の要旨

本研究の目的は、人々の学校から仕事へ、子どもから大人への「移行」経験に重要な意味や機能をもつ地域的な特質を教育・労働・家族・文化等に見出し、人々の生き方・働き方との関連を明らかにすることを通じて、若者支援の枠組みを検討することである。そのために愛媛県新居浜市をフィールドとして多世代へのインタビュー調査やフィールドワーク調査を実施した。調査の結果、「住友」と「祭り」が新居浜の人々の「移行」のイメージを強力に形成し、新居浜らしいローカルな生き方・働き方を成立させていることと、そのための具体的な振る舞いを獲得する場・装置として「青年団・祭り」「祭りをめぐる家庭生活」「学校と地域のかかわり」など生活の諸側面をとらえ、幅広い社会層を地域経済やコミュニティが包摂していることを明らかにした。以上の知見をふまえて若者支援の枠組みを検討し、多様な組織やコミュニティへの参加促進、社会とのつながり形成の視点で学校教育を構想することや、ユニバーサル型包摂コミュニティの形成に向け、若者支援を社会教育の文脈で再編する可能性を提起した。

1. 研究の目的

本研究は、愛媛県東部（東予地域）での調査から、地域の人々に経験された学校から仕事へ、子どもから大人への「移行」（トランジション）を明らかにする。調査地域に固有の経済的・文化的状況と人々の生き方・働き方を関連づけて分析することを通じて、地域的な特質をふまえて若者支援のあり方を検討する。

若者の雇用や自立が問題化した1990年代を境に、日本的「移行」の成立と変容に関する研究が興隆した。それらの研究は、学校、家族、企業に包摂されながら教育達成・職業達成に勤む子ども・若者が歩んだ「戦後日本型青年期」（乾 2010）や、それを可能にした「戦後日本型循環モデル」（本田 2014）という日本の社会システムの特徴を浮かび上がらせた。同時に、「移行」をめぐる子ども・若者の困難は「戦後日本型青年期」「戦後日本型循環モデル」の崩壊・破綻という、教育・労働・家族等の領域間の構造的・制度的な問題としてマクロな視点から理解され、学校と職業の関係再編や就労支援等の議論・施策が進められてきた。

しかし近年、地方の若者（石井ほか編 2017）や「大企業型/地元型/残余型」（小熊 2019）といったキャリア類型など、人々の生き方・働き方の多様性が注目されている。これらの多様性

は戦後日本型循環モデルでは十分に考慮されておらず、マクロな視点だけで「移行」上の困難を理解し移行支援を構想するには限界がある。

そうした生き方・働き方のなかで「移行」はどのような過程と意味として経験されているのか。その「移行」を成立させている教育的、労働経済的、生活文化的な資源や装置は何か。本研究ではこれらを明らかにしながら、地域的な特質をふまえた若者支援のあり方を検討する。とくに、地域の特質や人々の学校、家庭、職場、地域社会におけるさまざまな経験から「移行」において重要な意味や機能をもつ要素を明らかにし、若者支援の枠組みについて再検討を行う。

2. 研究の方法と調査の概要

「戦後日本型青年期」「戦後日本循環モデル」の議論の前提には製造業を中心とした「大企業型」（小熊 2019）の生き方・働き方や、「専業主婦」「教育ママ」と「専業子ども」（小谷 2008）といった「近代家族」的ライフスタイルが想定されている。ゆえに、当該モデルは工業集積型の大都市圏において顕在化していた可能性が高い。当該モデルは産業構造の転換や雇用構造の変容ともなって瓦解し、その脆弱性を露呈したと指摘されているが、多様な地方都市にも同じ説明が当てはまるかは未検証である。したがって、モデルの瓦解にもなう若者の困難という図式も、さまざまな地域の文脈の事例から検証される必要がある。

本研究では、戦後日本型循環モデルが成立し

*助成決定時

愛媛大学教育学部 准教授

やすかったと考えられる工業都市のうち、地域的な特徴が顕著に観察される地方都市を調査フィールドに選定した。具体的には、当該条件に合致する地域のひとつとして愛媛県東予地域、とりわけ新居浜市を調査フィールドに選定し、地域の社会構造の特質と現地の人々のキャリア形成の実態を明らかにするため、愛媛県新居浜地域の産業・文化・教育・生活に関するフィールドワークと多世代の現地住民に対するインタビュー調査を計画した。

調査に先立って行った地域レビューにおいて、東予地域内の他自治体（今治市、西条市、四国中央市）に比して、新居浜市では地域特性をふまえた調査と分析をより精緻に行うことができると判断した。その理由は、新居浜地域には、①統計データを参照するのに自治体合併の影響が比較的小さいこと、②当該地域の高卒者進路状況が特徴的であること（男子大学進学率が全国平均を大きく下回り、低下傾向）、③地域の基幹産業として製造業を支える大企業の影響力がさまざまな史料から確認できること（住友グループ関連、戦後日本型循環モデルの定着が想定可能）、④住民の生活に大きな影響を与える伝統的な地域行事が存在すること、であった。

新居浜という地域は別子銅山や多喜浜塩田と、歴史的に産業資源に恵まれてきた。多喜浜塩田は1959年に廃田となったが、今回は現在の地域雇用にも大きな影響力を与え、別子銅山の開坑以降の新居浜の経済基盤を確立させた「住友グループ」の存在に着目する。

典型的な地方工業都市である新居浜は、住友グループ発祥の地である。地域の雇用経済状況を向上させるとともに、のちに新居浜市管理に移行となる小学校を建設したし、病院も建設した。社員の買い物のための百貨店をつくり、女性のサービス産業基盤をつくった（宇都宮 2004、2008）。

住友は現地の雇用を生み出しているだけではない。別子銅山開坑以後の産業発展は、地域の伝統行事の維持・再生産にも寄与したと言われている。その伝統行事とは、四国三大祭り、日本三大喧嘩祭りの一つとして知られる「新居浜太鼓祭り」である。コロナ禍を経て2022年10月に3年ぶりに祭りが開催されたことは、地域の話題として全国テレビ放送で取り上げられた（NHK「おはよう日本」2022年10月18日放送）。新居浜太鼓祭りについて、新居浜市ホームページでは次のように解説されている。

別子銅山の開坑により産業が発展し、地域経済が発達するにつれて太鼓台を所有する複数

地域の対抗意識も高まり、明治中期以降から急速に大型化し…（中略）太鼓台の飾りが豪華になり、大きさも大型化するということが、その建設費用や太鼓台を担ぐためのかき夫のパワーが多く必要になります。新居浜太鼓台がこれらの問題を克服し、数多くの改良を重ねて現在に至っていることは、太鼓台が地域の「財力」と「腕力」の二方向から発展したといえるようです。現在では、瀬戸内海沿岸にある数多い太鼓台のなかでも、150人余りの男衆で差し上げられ、澄んだ秋空に舞う新居浜太鼓台の姿は、その豪華絢爛さ、勇壮華麗なことから「男祭り」の異名をもち、毎年約20万人の観衆を酔わせて止まない魅力ある祭りとして、全国的にも知られるようになりました。（新居浜市ホームページより）

以上のように「住友」関連の工場や会社が地域経済を発展させ、祭りが地域の文化的象徴となってきたことは、図1から明らかなように、新居浜で育った人々にとってあまりに自明であり日常の風景となっているのである。

他方で新居浜は、少子高齢化のほか、進学・就職を契機に若者が地域外へ流出するという地方都市らしい特徴も有している。

こうした地域的な特質をふまえたうえで、本研究では子ども・若者の学校から仕事へ、子どもから大人への「移行」経験の地域特性を明らかにしていく。そのために、新居浜市在住の人々を主たる調査対象者とし、サンプリング手法として機縁法を駆使しながら調査協力者や調査協力機関を得、インタビュー調査とフィールドワーク調査を実施した。実施した調査の概要等は表1に示したとおりである。

本研究では対象地域での対面インタビューやフィールドワーク等の質的調査の実施を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により非対面調査を急遽導入した。オンライン調査を

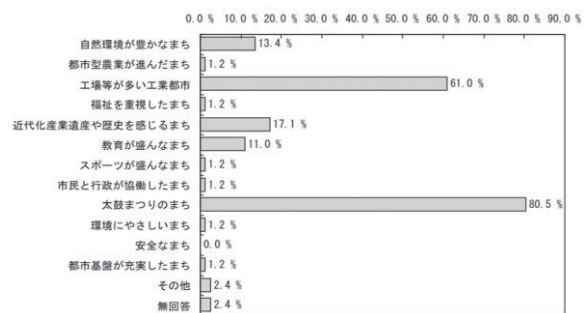


図1 出身者による新居浜市のイメージ
出所) 『新居浜市出身者等意向調査報告書』、p. 10
(<https://www.city.niihama.lg.jp/uploaded/attachment/3994.pdf>、2021年9月17日閲覧)

計画的・戦略的に活用したというよりまさに試行錯誤の過程であったが、調査方法の変更を通じて質的調査の意味や意義に改めて向き合う重要な機会となった（知念・尾川・都島 2023）。

なお、以下で記述する知見や解釈がどの調査から得られたものかを括弧内に示した（表 1 左端の「No.」と対応）。また、必要に応じて研究助成期間外の調査で得られた結果も参照した。

3. 各種資料にみる新居浜の「移行」

調査結果の紹介に先立ち、新居浜という地域の特性、とくに学校から仕事への「移行」にかかわる状況を統計データ等から確認しよう。

新居浜市の高校卒業後の進路について、統計調査から描き出してみよう。高卒就職率について、全国と新居浜市の男女別の動向を比較した

ものが、図 2 である。全体的な傾向として、1980 年代以降に就職率が低下していく傾向が確認できるが、2000 年以降において新居浜市の値と全国平均の傾向がやや異なってくる。全国平均では 2000 年代以降も男女ともに低下傾向が続き、2010 年ごろ下げ止まりが起こっているように理解できる。それに対して新居浜市の場合、とりわけ男子において 2000 年以降の高卒就職率が高くなっている。つまり、2000 年以降、新居浜市は全国的な傾向とは異なり、男子の高卒就職率が高まっている。驚くべきことに、2010 年代後半の男子高卒就職率は 1980 年代並みの数値を示しているのである。

女子の高卒就職率は、どの時期でも全国平均を上回っているが、低下傾向の後に下げ止まっているのは全国平均と同様の傾向を示している。

表 1 実施調査一覧

No.	調査日	形態	地域	性別	年代	協力者学歴	職業等	備考
1	2020/9/10	個別 (Zoom・現地)	川東	男	20 歳代	高校卒	建築資材販売	青年団関係
2	2020/9/30	個別 (現地)				大学卒	学校教員	専門学校
3	2020/10/1	個別 (Zoom)	川東	女	20 歳代	大学卒		
4	2020/11/13	個別 (現地)	上部	男	30 歳代	大学卒	公務員	青年団関係
5	2020/11/27	個別 (Zoom・現地)	川東	男		大学卒	公務員	青年団関係
6	2020/12/4	個別 (現地)	上部	男	50 歳代	大学卒	公務員	青年団関係
7	2020/12/25	個別 (Zoom・現地)	川西	男	70 歳代	高校卒	住友関連 OB	青年団関係
8	2021/1/8	個別 (Zoom)	川西	女	20 歳代	高校卒	不動産業	
9	2021/7/20	グループ (現地)	上部	男	20-30 歳代	高校中退 高校卒 大学卒	住友関連 電気工事業 食品製造販売 公務員	青年団関係
10	2021/7/21	グループ (Zoom・現地)	上部	男	20-30 歳代	高校卒 専門卒 大学卒	医療関係 鉄工業 塗装業 公務員	青年団関係
11	2021/9/24	グループ (Zoom)	上部	女	40-60 歳代	短大卒 大学卒	社会福祉サービス	こども太鼓
12	2021/10/16	個別 (現地)	市外	女	30 歳代	大学院卒	学校教員	普通高校
13	2021/10/17	個別 (現地)		女	40 歳代	大学卒	公務員	
14	2021/10/25	個別 (Zoom)		女	40 歳代	短大卒- 大学卒	社会福祉サービス	こども太鼓
15	2021/10/31	フィールドワーク (現地)	上部					太鼓台の解体 運搬
16	2021/11/1	グループ (現地)						ハローワークヒアリング
17	2021/11/26	個別 (現地)		女	10 歳代	専門学校在学中	看護	
18	2021/12/5	個別 (Zoom)	上部	男	40 歳代	大学卒	住友関連	青年団関係
19	2022/3/22	個別 (Zoom)			10 歳代	高校在学中		大学進学予定
20	2022/3/24	個別 (Zoom)			10 歳代	高校在学中		大学進学予定
21	2022/8/3	個別 (現地)		男	40 歳代	大学卒	学校教員	中学校
22	2022/8/3	グループ (現地)		女	40-60 歳代	短大卒 大学卒	社会福祉サービス	こども太鼓
23	2022/8/4	フィールドワーク (現地)						図書館資料収集
24	2022/10/1	個別 (現地・Zoom)	川東	男	20 歳代	大学卒	学習塾スタッフ	青年団関係
25	2022/10/2	個別 (現地)	川東	男	40 歳代	大学院卒	住友関連	青年団関係
26	2022/10/2	個別 (現地)	川東 川西	女	70 歳代	高校卒	居酒屋経営	
27	2022/10/15	個別 (現地)	川西	女	40 歳代	短大卒	喫茶店経営	
28	2022/10/16-18	フィールドワーク (現地)	上部 中心					太鼓集会観覧 太鼓祭り参加
29	2022/12/12	個別 (現地)	川東	男	50 歳代	大学卒	学校教員	小学校
30	2022/12/13	個別 (現地)	川西	男		大学卒	学校教員	中学校

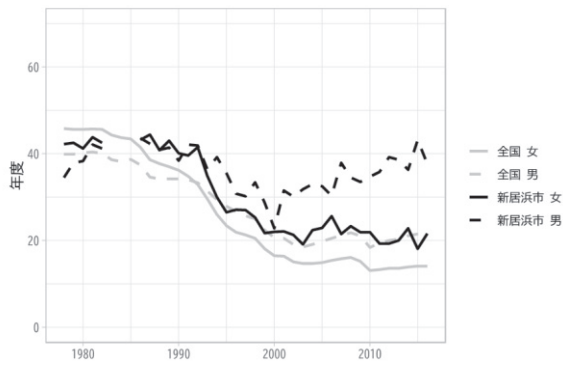


図2 高卒就職率の推移
出所) 文部科学省「学校基本調査」各年度版

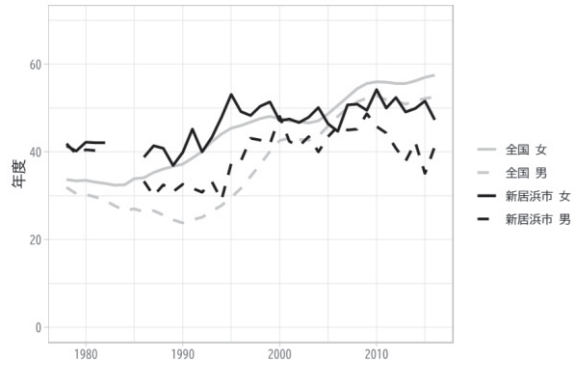


図3 大学進学率の推移
出所) 文部科学省「学校基本調査」各年度版

大学進学率についてはどうか。図3をみると、2000年ごろまで新居浜市では男女ともに、全国よりも大学進学率が高い状態が続いてきた。しかし2000年代になると全国よりも低くなり、特に2010年代の男子においてその傾向が明確である。就職率と大学進学率の推移をふまえると、少なくとも2000年代になって、新居浜市は全国よりも、大学進学するよりも就職を選択する男子高校生が多い地域となっている。他方で女子は、高卒就職率も大学進学率も全国平均により近い動向を示している。

市内には県立高校5校と工業高等専門学校がある。県立高校は、学力ランクの異なる普通科2校、工業高校1校、商業高校1校、総合学科高校1校である。市内における高校のトラッキング構造は明確であり、卒業後の進路と結びついている。専門高校では就職者が多く、普通高校では大学進学等の割合が高い。しかし、「進学校」と評されるある高校の教員は、近年の進学実績の停滞を懸念していた(No. 12)。

では、高卒就職する男子たちはどのような仕

事に就くのだろうか。図4を見ると、就職率が低かった2000年ごろでは製造業就職者の割合が相対的に低い(2003年度卒業生で48%)のに対し、その後漸増し2018年度卒業生では71%まで高まっている。しかもこれは、県内就職に限定した数値である。2000年代以降の男子高卒就職率の顕著な上昇は、比較的安定した地元製造業雇用の復調に支えられており、同時に男子大学進学者の減少をとまってきた。このように解釈できるだろう。

全国的には、2000年代になって一貫して大学進学率が上昇傾向にあるが、新居浜市では必ずしもそのような傾向は見られない。男子に限って言えば、全国とは真逆の傾向を示している。その背景には、良質な製造業雇用からの新規高卒求人があると推察され、大学進学をキャリア形成上のメリットとして希望・期待する家庭や生徒が減少しているのかもしれない。高校教員が懸念していた市内進学校の進学実績が伸び悩んでいる状況には、こうした地域的な進学期待の変容が影響しているのかもしれないのである。

以上のように、新居浜では学校から仕事への「移行」において、とくに男子の地元高卒就職者が相対的に多いことが明らかになった。次節では、そうして地元残留層の若者が地域との関係を形成しながら子どもから大人へと「移行」していく諸相を描出していく。

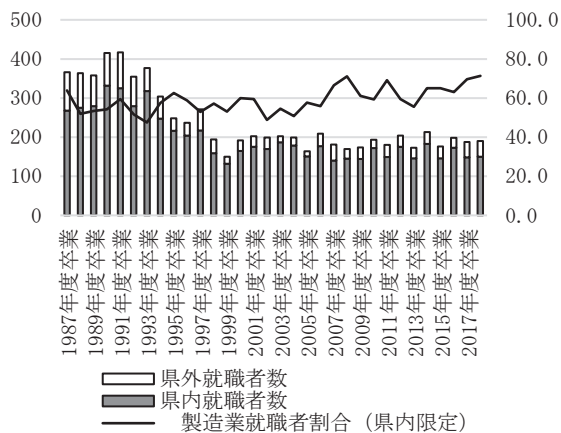


図4 新居浜市高卒者の就職動向(男子)
出所) 新居浜市「新居浜市統計書」各年度版

4. インタビュー調査

以下では、個別あるいはグループで実施したインタビュー調査やフィールドワーク調査をもとに主な調査結果と解釈を示す。

4.1 青年団と祭り：男性の視点と経験

新居浜太鼓祭りが地元の人々にどのように語られるかは、地区によって大きく分化している。「喧嘩上等」で荒々しさをアイデンティティと

する川東地区、川西地区に対して、上部地区は平和運行を重視し新居浜市の観光資源として活用されやすい。しかし、どの地区にも共通するのは「かきくらべ」に顕著な、太鼓台間（自治会間）での競争・対抗意識である。そうした意識は年長世代から連綿と受け継がれ、小学生のうちには太鼓台をめぐる帰属意識・対抗意識が醸成されるという（No. 4）。しかし、市内では高校卒業まで太鼓台を担ぐ「かき夫」になることが禁止されているため、祭りに熱を上げる男子は高卒後に家族や先輩・同輩を通じて青年団に加入していく。青年団で活躍する親をもつ息子は、幼少より青年団メンバーから大切にされ、いつしか自らも青年団に入ることが自明のことになっていく。あるいは「指揮者になりたい」という憧れや先輩とのつながりで青年団の門をたたくのである。

「一般かき夫」に対して、青年団は太鼓台運行の中心的な役割を担う。地区によって規模や顔ぶれ、活動の具体は多様であるが、非大学卒層の地元就職者（地元定着層）が中心となって運営される場合が多い。ある青年団メンバーの語りによると、メンバーは無職の者から社長まで多様な人間で構成されているが、無職の者が社長から職業紹介を受け実際にそこの社員になることもあるという（No. 5）。しかし、「無職の人に社長が顎で使われたりみたいなこともある」というように、青年団内では属性にとらわれないという意味で「平等」な上下関係があるという（No. 5）。青年団内の地位決定には、活動に普段からどれだけ貢献できているか、その一つとして祭りにどれだけ時間と労力をかけ、また太鼓台に関する知識を十分に有しているかが重要な指標となっているようであった。青年団内での評価の象徴として、太鼓台の「指揮者」に指名されるかどうか、がある。指揮者に指名されるには青年団内での信頼が必須である。そのため、祭り期間以外にも青年団メンバーとして自治会活動（運動会、地区清掃、ゴミ分別等）への参加・貢献が必要になる。

青年団に入る男性たちは、1年を通じたその活動、とりわけ祭りとその準備活動に多大な時間的・体力的コストをかける。毎年9月ごろから仕事終わりに毎晩自治会館に通い、太鼓の練習や太鼓台の組み立て、運行計画等を打ち合わせる。その日の作業が終わると、そのまま自治会館で飲み会が始まり、帰宅するのは深夜となる。そのようなライフスタイルなので、この期間はほとんど家におらず、二日酔いで仕事を休むこともしばしばあるという。そんな夫に呆れ、しびれを切らした妻から「青年部やめるか、且

那やめるか」と究極の選択を迫られてしまう者や、実際に家庭生活との両立が難しくなり青年団を抜けざるを得ない者もいる（No. 1）。そうして青年団の若者は「結婚するなら新居浜の女性がいい、祭りに理解のある人がいい」と考えるようになる（No. 10）。

祭り期間の10月16日から18日の3日間は、毎日早朝から深夜まで太鼓台を運行しているため、当然ながら仕事を休むことになる。ここで祭りと仕事の調整が必要になる。祭りに理解のある会社も、そうでない会社もあるために、就職面接で「祭り期間は休みます」と申し出たり（No. 10）、仕事優先を強いる会社に年次有給休暇の申請と辞表を一緒に提出したりするなど（No. 1）、それぞれ工夫しているようだ。さらに、太鼓台どうしの「喧嘩」が勃発した場合には運行責任者らが警察に逮捕されてしまうこともあるため、代表的立場になった年には「僕、捕まっても構わんすか？」と会社に事前確認した者もいた（No. 1）。

青年団の男性たちはさまざまな調整を行いながら祭りに時間も体力も注いでいるが、この生活の前提には、自治会として太鼓台を所持・維持していくことが必要である。太鼓台の維持、とくに新調する場合には数千万円単位の費用が必要になる。この費用は主に自治会加入者からの会費や地域住民の寄付で賄われている。それゆえ、地域住民に認められない限り太鼓台の所持・維持は不可能である（No. 15）。2000年代に太鼓台を新規に所持する自治会が急増しているが、地域住民からの理解を得て自治会公認としてもらえるからこそ、太鼓台を持てるのである。ただし、祭りの荒々しさを忌避する人々もいるために、自治会全体の承認を得るのはすんなりとはいかない。調査の過程では、自地区の太鼓台所有を目指す若者層が青年団として地域活動を精力的に行い、地域に貢献していることを住民に認めてもらえるよう頑張ったというエピソードが語られた（No. 7、15）。

なぜ、このようなコストを払ってまで彼らは太鼓台を所有したいと思うのか、学歴や社会的地位による自らの優位性・卓越性をキャラにされる人間関係に自ら身を置くのか。このことを質問すると、だいたい「かっこいい」「憧れ」といった答えが返ってきた。さらに何が「かっこいい」と思うか、と突っ込んで聞くと、実はそれには誰も明確な答えを言ってくれなかった。教えてくれないというよりむしろ、答えられない、「高校球児なら甲子園目指すでしょ」くらい言語化できないことのようなのである（No. 9）。子どものころから憧れた「指揮者」「かき夫」

が彼らにとって「大人」の理想像になっている可能性がある。その「大人」イメージは、青年団のなかで役割を担い活躍するなかで「この村に育って、そこで自分が受けてきた恩もあるし。それを言うたら地域に返していかないかん」

(No. 1) という語りにも象徴されるように、意識や行動として体得されているようであった。

フィールドワーク調査として参加した2022年10月の新居浜太鼓祭りでは、世代間の交流のなかで若者が地域の「大人」として承認されていく場面が見られた (No. 28)。太鼓台運行途中の休憩場所では、10歳代から70歳代までの男性と一緒に座り込み弁当を食べる場面があった。ブルーシートを敷いて年配者に座ってもらったり、飲み物を配ったり、青年団の若いメンバーがせせせと動いていた。青年団のなかでは指導的な立場の者も、年配「かき夫」の前では雑用を率先して引き受けていた。この場面では、地域における若年層の役割意識や年配者への敬意のようなものを感じないわけにはいかなかった。休憩後、再び運行が始まると、太鼓台の上に乗る20歳代「指揮者」に対して70歳代と思しき男性が「かっこええのう、期待しとるよ」と話しかけ、若者は「おう、任せといてよ」と応じていた。この光景に象徴されるように、文化的な地域の大人の役割獲得と承認のやりとりが、祭りという場、青年団という組織を通じて展開されていた (No. 28)。

インタビュー調査では太鼓台どうしの競争・対抗意識が強調されていたが、運行時に太鼓台どうしがすれ違う時には「鉢合わせ」(太鼓台を互いにぶつけ合う喧嘩)になるどころか、相互に「御花」(寄付金)を渡しあっていた。さらには互いに「頑張れよ」と声をかけていた。聞くと、自治会が違っても学校時代の先輩・後輩であり、友人として仲良くやっている、ということであった。華々しさと荒々しさのイメージだが、中に入ってみると規律や規範、あるいは仲間意識の強い祭りであることが理解できる。それらに適応し、承認される過程で地域の「大人」として自己を語る文脈を得ているのだろう。

地区により違いはあるが、30歳代前半になると彼らは青年団を卒業し、壮年部や青年団OBとして活動を見守る立場へ移行していく。青年団が問題を抱えたときや新たな試みを開始するときには必ずOB連中に相談があり、OBたちは期待を込めて激励したり計画不足を注意したりする。そこで、自分たちが年長世代から学んだことを思い返しつづ次代の地域の担い手を育てているのである (No. 6)。

4.2 祭りに対する女性の視点と経験

新居浜太鼓祭りは男性中心の祭りで、女性は小学校を卒業すると太鼓台に触れることすらできない。それにも関わらず、新居浜の女性は祭りを心待ちにしている。「キンモクセイの匂いがして、夜になったら太鼓が鳴る」というフレーズは新居浜で暮らす女性から語られたフレーズである。キンモクセイが香る頃になると「わくわく」した気持ちになるし、子どもたちは「どんでどん」と太鼓のリズムをとって遊びだす。ひとたび「喧嘩」がはじまれば、腰が曲がったおばあちゃんがすずと背筋を伸ばして、大きな声で声援を送りだす。新居浜人の血が騒ぐ、と女性たちは語る (No. 8、11、26、27)。

ここでは、新居浜で暮らす女性に聞き取ったエピソードにもとづいて、太鼓台運営に直接的に携わることが許されていない女性や子どもがどのように祭りに関わっているのかを示す。

前述のように、祭りが近づくにつれて青年団の男性は祭りに関連した活動が増え、家を不在にすることが多くなる。祭りの時期は「お父さんがいない」ことが当たり前となる。そのため、9月から10月にかけて「しんどい」ということを口にする女性は当然いる。こうした女性側の苦勞が青年団男性への聞き取りでも話題になっていたため、女性側からは祭りについての否定的な意見や、祭りの時期に経験される苦しみが語られるものと当初予想していた。だが、実際に女性に調査をしてみると、祭りに対する不満ばかりが語られたわけではなかった。むしろ主体的に参加しているという声も聞かれ、祭りは決して男だけのものではない様子が伺えたことは特筆すべき点であると考えられる。

本調査のなかで女性に対して行ったインタビュー調査は9回(※学校への聞き取りに応じた女性は省く)であり、グループでの聞き取りも含めて10名へのインタビューを実施した。

9回のうち3回は子育て広場で働く女性スタッフを対象に行った。当初の計画では、子育て広場を利用する女性にアクセスしようとしていた。子育てママを中心とする女性側の意見や、地域外からの移住者の声を聞き取ることができないのではないかと考えたためである。だが、新型コロナウイルス感染症が猛威を振るう中で、子育て広場自体、めまぐるしく変化する感染者数に翻弄され、臨時休館や利用者制限を行うような状況にあった。母親や乳幼児への感染リスクも高まる中、県外者の我々が無理に調査をお願いすることはできなかった。結論を言えば、利用者への調査は実現しなかった。その代わりに、子育て広場に従事する女性スタッフへのイ

インタビューを改めて依頼し、快諾していただいたことから調査可能となった。以下、知見を3点に整理して紹介したい。

4.2.1 晴れ着を装う場としての祭り

子育て広場のスタッフへの調査を中心とした女性への聞き取りでわかったことは、新居浜の女性にとって祭りは、「晴れ着姿」を装うことができるというイベントである。また、子育て世代の女性については、「晴れ姿」の論理も含めて、子どもを通して祭りに参加している。

新居浜の女性にとって太鼓祭りは「晴れ着姿」「おめかし」ができるイベントだということが、複数の女性によって語られた (No. 26、27)。祭り前になるとこぞって髪を整えるようになり、市内の美容室が混雑するという。彼氏が太鼓台で活躍している女性は、美容院できれいに整えたりするということがあった (No. 26)。女性の中には、太鼓台運営にかかわる青年団男性を理想のパートナーと考える場合もあるという (No. 8)。

太鼓祭りはイメージとしてお正月に近いとし、40代女性は自身が小さかった頃には、「振袖」や着物を着て参加する女性がいたという。「振袖」から時代は流れ、女性が中学生くらいになると、こんもりと肩パットが付いた「工藤静香」のようなスーツを着た若者が参加していたという。それが、彼女にとっての当時の「大人」のイメージであり、「大人になったらあれ着るんだ」と思ったという (No. 26)。

また、現在の太鼓祭りでは、ダボシャツや剃り込み、エナメル素材のような黒いジャケットや派手な色をした髪飾りなどの「祭りコスチューム」に身を包む未成年がいる。太鼓祭りのフィールドワークにおいても、「祭りコスチューム」を装う乳幼児から10歳代の未成年の姿があった。なお、これらの衣装は、母親や祖母が仕立てる場合もある。つまり、子育て世代の女性は、子どもの「祭りコスチューム」を準備するという役割を通じて、太鼓祭りに参加しているといえる。一方の未成年層は、「祭りコスチューム」を身に纏い、自分の「推し」の太鼓台 (多くは、自身が所属する地域の青年団が運営する太鼓台である) につきしたがって行動する。なお、太鼓台について回る女子中学生を「びよんこ隊」と表現する人もいた (No. 8、22、28)。

運行の合間の休み時間には、青年団の家族を中心に太鼓台に乗せてもらう、触らせてもらう時間があった。「祭りコスチューム」を身に纏って太鼓台に乗ってポーズを取るわが子の姿を写真撮影する母親の様子が、そこかしこで観察された (No. 28)。

4.2.2 観覧をする特権

新居浜生まれ・新居浜育ちの女性に行ったインタビューでは、中学生の頃は友達同士で連絡を取り合い、「けんか」などが勃発したときに現場に駆け付けるといった参加の仕方を語っていた (No. 8)。一方で、青年団の男性グループインタビューでは、他の太鼓台を見に行く行為は、太鼓台を運営する男性には許されない所作だと語られている。太鼓台運行中に喫茶店で休むより、他の太鼓台の「トラブル」を見に行くことは許されない行為であるという (No. 9)。

太鼓台の運営は許されないものの、様々な太鼓台を見に行くという参加のあり方は、女性 (ないし、太鼓台運営に関わらない参加者) に許された特権的な立場であるといえる。

4.2.3 子ども太鼓の運行と青年団男性との協働

子育て世代の女性の太鼓祭りの参加方法として「子ども太鼓」も重要である。「子ども太鼓」は子どもが担いで運行できるよう、子ども向けにコンパクト化された太鼓台である。その運営は母親を中心に組織される子供会によってなされている (No. 14)。子ども太鼓を運営する女性は、「子どもは太鼓と一緒に育てる」を合言葉に、青年団の壮年部男性に太鼓台運行に関わってもらっていることを説明した。

筆者は実際に子ども太鼓の運行に関わったが、(筆者も含めて)太鼓台のことを良く知らない女性が子ども太鼓を通して、運行方法や関わり方を学んでいく過程が観察された。とりわけ、結婚を期に新居浜市に移住した女性にとっては、子育てを行う上での地域社会との接点として「子ども太鼓」のコミュニティが機能していたといえる。新居浜市内の子育て支援サービスの情報などを「子ども太鼓」を通して収集することが可能となっていた。

また、子ども太鼓の運行を通して、女性たちは青年団が運営する「大人太鼓」の大変さや苦勞を理解するきっかけとなる。特に、太鼓台を担ぎ上げる「差し上げ」がとても難易度の高い技術であることは女性たちも理解しており、「差し上げ」が綺麗であるとか、上手であるといった観点で各地区の太鼓台を評価している (No. 22)。上述の背景により、個人差がありながらも太鼓祭りに対する肯定的な態度が女性たちに醸成されていく過程があるといえる。

4.3 新居浜における学校と地域のかかわり

学校教育のなかで「祭り」「青年団」が地域

とのつながりのメディアとなっている。それは、小学校や中学校の生徒指導場面に問題も利点ももたらす。私たちがフィールドワークを行ったある小学校での「太鼓集会」は、単なる学校行事というより地域と学校の境が融解するような雰囲気だった。学校が地域の伝統文化を学習材として活用し、児童と地域の接点を意識させる重要な場となっていた(No. 28)。

しかし教師によると、祭りの時期になると児童たちに落ち着きがなくなり浮足立つという。あるいは、祭り参加に関する学校の方針を逸脱する児童もいる。それらの児童に対する生徒指導の方針をめぐり、教師たちは必ずしも一枚岩になるわけではない。祭りに理解がある新居浜出身の教員とそうでない教員との間にある考え方の違いである(No. 28)。

小学校でのヒアリングでは、太鼓祭りと学校の関りについて聞き取った。新居浜の学校では、祭り期間中、太鼓台を小学校や中学校のグラウンドに招き集会を行っている(「祭り集会」「太鼓集会」と呼ばれる)。教育課程上では「特別活動」「総合的な学習の時間」に位置づけられ、地域理解や郷土文化の学びを深める機会となっている。本調査で観察したある小学校の太鼓集会では、青年団に所属する男性がPTA会長を務めており、集会当日は太鼓祭りのルーツについての講話を行っていた(No. 28、30)。

青年団と学校の関わりは、太鼓集会のみに限られない。ある中学校では職場体験学習の体験先に「〇〇という業種の体験先を探している」と地域に相談すれば、青年団のつながりで体験先をスムーズに紹介されることがあるという。また、中学校では近年不登校が学校問題化していると語られたが、自治会の(主に民生委員)を通して家庭の様子を把握したり、教師の指導が十分及ばない場合に青年団の人間関係を通じて当該生徒にアプローチしたりできることもあるという(No. 21、30)。青年団活動や自治会活動の活発さは、新居浜の小中学校において重要な地域教育資源となっている。

高校では、市内5校が形成する階層構造は他地域同様に卒業後進路のトラッキング機能を有している。しかし、専門高校の地元就職希望者には住友希望だけでなく祭りを重視して地元に残ろうとする者が驚くほど多いという(工業高校教師談)。高校進路担当者や職業安定所担当者へのヒアリングでは、雇用条件や企業求人における「祭り」配慮があることが語られた(No. 2、16)。このように、新居浜に固有の環境のなかで児童生徒は学び、自らの進路を展望していく。大学に行かなくても「住友」で働

ば「大きな家」が建てられるし、そのように住友に生活を支えられている人は、社員の家族も含めて新居浜人口の半数に上るとの言説は(No. 7)、高卒就職者が積極的に、安心して地元定着を展望できる資源の一つだろう。

しかし住友と祭りの存在は地元就職していく高卒層だけでなく、地域から一度は流出する大卒層のワークキャリアとライフキャリアの見通しをも水路づける例が看取された。祭りや青年団活動のために新居浜で公務員就職を希望した大卒者や、住友に転職したUターン層。「太鼓とともに子どもを育てたい」と考え、住友関連企業に転職してUターンした大卒者などがその例である(No. 18)。

このように、文化的な面でも経済的な面でも、新居浜の特質のなかで、新居浜の学校は児童生徒と地域とのつながりを強化するよう機能し、児童生徒や卒業者のワークキャリアとライフキャリアを支えている側面が看取できた。

とはいえ、調査においては祭りに無関心な人々も度々話題になった。フィールドワーク調査で観察した太鼓集会が行われた小学校は、伝統的に太鼓台運行が盛んな地区であった。太鼓集会では、太鼓台に熱中した地域住民が殺到し、学校側が運営に苦勞していたと、学校教員は語った。そうした地区にも祭りに無関心で自治会に加入せず、自治会や青年団に関わろうとしない家庭が散見されるという(No. 29、30)。

また、祭りの期間に旅行に行くために学校を欠席する児童(家庭)の存在も語られた。祭りに参加するために欠席する児童(家庭)がいる一方で、祭りに無関心なために学校に行かない層の存在が、語りから浮かび上がってきた。今日の新居浜の祭りの参加実態は、二極化しているのかもしれない(No. 29、30)。祭りに対する新居浜住民の関心や関与の多様性については、今後さらに量的調査なども取り入れて検証したい。

5. 結果のまとめとインプリケーション

5.1 調査結果の整理と考察

以上の調査結果から、新居浜は一見して若者の「移行」に大きな問題を抱えていない地域にも見える。しかし本研究は、問題や困難の有無やその解決必要性だけに焦点化せず、子ども・若者の生き方・働き方がどのように経験されているかという観点から「移行」の地域特性を読み解くことを目的とした。人々の仕事と生活を支える諸要素の機能や関係を明らかにすることで、より広い社会層が「移行」を豊かに経験するための条件を抽出し、若者支援の枠組みを再考・提案したい。

調査から明らかになったこととして、第 1 に、社会化装置としての青年団の存在と機能が指摘できる。すなわち、新居浜ローカルな規範や秩序に適応し地域コミュニティのメンバーとして必要な振る舞いや考え方を獲得していく場として、学校外のローカルな社会化装置として祭りや青年団が機能していた。

祭りを介した人間関係や青年団は、とりわけ新居浜の男子・男性たちにとっての「サード・プレイス」「第三の領域」と考えることができる。これらの概念は近年の「移行」支援に関する国内外の諸研究において着目されており（居神編 2015、生田 2021）、就労支援とともにユースソーシャルワーク（ターゲット・サービスの）とユースワーク（ユニバーサル・サービスの）を中心とする子ども・若者支援のキーワードである。無職の者も青年団活動に参加し、そこで就労機会を得ることができるという事例（No. 5）は、青年団を通じて経済的にも文化的にも地域に包摂された事例と解釈できる。その意味で新居浜の青年団は、ユースワーク機能をも果たす側面をもつ。

第 2 に、新居浜の学校と地域のかかわりは、児童生徒のライフキャリア展望とワークキャリア展望の両方を可能にしている。学校と地域の連携について、従来は学校に地域が協力する方向が前提視される傾向が批判されたが（渡部・尾川 2020）、今日では「社会に開かれた教育課程」というカリキュラム改革理念のもとで相互協力が強調されるようになった。新居浜では祭りが児童生徒の学びに資する地域資源として活用されているが、学校での「太鼓集会」が青年団や地域の人々にとっても地域文化の世代間継承や交流の重要な場となっている側面もある。こうした場で児童生徒は新居浜ローカルな「大人」イメージやその振る舞い方を体得していく。新居浜で生きる（育つ）というライフキャリア展望を形成する場が、学校という場に（制度的に）設けられているといえるだろう。

加えて、高校調査で明らかになったように、住友グループの存在による良好な就職環境は、新居浜でのワークキャリア展望をも可能にしている。高校の進路指導担当者は、そうした就職環境の地域的特質を理解し、「住友」「祭り」重視の進路希望を実現可能なものとして就職指導をしているのである。

第 3 に、新居浜の女性の祭りへのかかわり方に見いだされる家庭生活や若者文化の諸相から、女性たちに意識される新居浜ローカルなジェンダー規範が明らかになった。

太鼓祭りは女性が太鼓台に触ることは許され

ないため、「観覧」という方法でしか参加することができない。しかし、「晴れ着」を装い「おめかし」をすることは許されており、美容院に行くことやファッションを楽しむといった、若者の消費文化を正当に楽しむ機会となっていることが明らかとなった。太鼓祭りにおいて、その時代の流行ファッションを身に纏う若者を見ながら、女性たちは「大人」のイメージを内面化していく。

また、青年団において太鼓台を積極的に運行する男性を理想のパートナーとして捉える女性も一定数おり、女性にとっての「おめかし」は青年団男性との交際にも関連があるといえる。

子育て世代の女性になると、太鼓祭りは「子育て」イベントの一環となる。「子ども太鼓」を運行する地域もあり、その運営には女性が主体的に関与している。なお、「子ども太鼓」をはじめとする地域コミュニティがあることで、地域社会への接続点を持った子育てが可能となる。特に新居浜市外から移住した女性にとっては、市内の子育て情報などを得る重要な交流の場となっていたといえる。

5.2 インプリケーション

以上の知見をもとに、若者支援の枠組みを再検討していく道筋を提起して稿を閉じたい。

第 1 に、人生前半期の若者支援として、学力向上や学歴取得といった人的資本向上の取組だけでなく、多様な組織やコミュニティへの参加促進、社会とのつながり形成の視点（尾川 2021）で学校教育のあり方を構想することである。換言すれば、地域や社会のためにどのような／どのように「資質・能力」を高めるか、有意な人材を輩出するか、だけでなく、地域や社会とどのように関係を取り結ぶかという視点も取り入れた、より多くの若者や個人を多様なチャンネルで包摂する地域社会の形成に学校教育を位置づける視点である。

その際には、進路形成に困難を抱える生徒への個別的支援ではなく、すべての児童生徒が多様なかたちで地域社会と関係を築ける場や機会を提供するといった、より幅広い包摂チャンネルの創出を学校カリキュラム内に位置付けていくことが重要になるだろう。とくに本調査からは、地域とかかわりながら生きるというライフキャリアの視点から新居浜ローカルなキャリア教育の可能性が展望できよう。

第 2 に、「移行」に困難を抱える個人に対するターゲット型福祉支援のみならず、より多くの人々の社会参画を促すユニバーサル型包摂コミュニティの構想として、若者支援の枠組みを

社会教育の文脈で再編する可能性である（生田 2021）。新居浜調査では、若者のキャリア形成の問題、とりわけ高卒者の進路保障や若者の雇用不安などについて大きな問題は語られなかった。しかし興味深いのは、そうした経済的な安定性のもとで若者たちが地域活動に積極的にかかわり、地域の「大人」としての自己認識と振る舞いを獲得している点であった。高卒就職希望者にとって安定した雇用のみならず、地域のなかで活躍の場や楽しめる場があること、仕事と家族以外に社会と有機的につながることのできるチャンネルとして、祭りや青年団が存在していることは重要である。

子ども・若者が新居浜について学び、新居浜での生き方・働き方に馴染んでいくことが新居浜ローカルな「移行」において重要であることをふまえると、若者支援をより広い社会層を対象とした学習機会として構想することが有意義であろう。すなわち、若者支援の枠組みを、困難を抱える個人を対象に救済・支援する福祉的・問題対処的なターゲット型パラダイムに限定せず、人間関係や個人と社会の関係をより多様で豊かにしていくユニバーサル型包摂コミュニティの形成に向けた社会教育へと、パラダイム転換する必要性（生田 2021）が指摘できる。生涯学習の推進や社会教育環境の整備がリタイア層の健康維持や生きがいづくりに偏重しがちな状況を見直し、若年世代の働くことや生活することを豊かにしていく内容を組み込むことを提案したい。分かりやすい施策として青年団の活動支援や女性のネットワーク形成支援が挙げられるが、このとき、行政として重要な視点は、それらのコミュニティから距離のある若者層を考慮することである。それゆえ、祭りや子育てに関心のある若者たちや、逆にそれらに関心のない人々のニーズをもとに活動支援することが必要だろう。

最後に本研究の課題について述べる。第 1 に、本調査で十分検討できなかった、必ずしも祭りを好まない人々の経験に焦点を当て、新居浜における「移行」をより多面的、多層的に把握する必要がある。加えて、新居浜調査の枠組みを他地域へ水平展開し、より多様な事例から本研究の枠組みを鍛えていきたい。第 2 に、上記とも関わるが、祭りや青年団などの包摂装置が「逆機能」を發揮している可能性の検討が必要である（祭りを「エスケープ」する人々、自治会未加入の不登校児童生徒の存在など）。第 3 に、これらの調査をもとに理論的検討を行い、「移行」研究と若者支援の発展に寄与したい。

発表論文

（学術論文）

- 知念渉・尾川満宏・都島梨紗(2023)「コロナ禍の困難から考える質的調査の特質と課題:愛媛県新居浜市での調査を事例に」『社会と調査』30、(印刷中)。
尾川満宏(2021)「人口減少社会におけるキャリア教育の探究:地域課題と学校教育との関係性に着目して」『教育学研究紀要(CD-ROM版)』66、pp. 771-776。

（学会発表等）

- 尾川満宏「人口減少社会におけるキャリア教育の検討」中国四国教育学会第 72 回大会、2020 年 11 月 22 日（オンライン・口頭発表）
尾川満宏・知念渉・都島梨紗「トランジション経験の地域特性を描く:「戦後日本型循環システム」の問い直しに向けて」第 94 回日本社会学会大会、2021 年 11 月 13 日（オンライン・ポスター発表）
Ogawa, M., Examining the school curriculum in regional revitalization: Focusing on Career Education in Japan, 学校課程與地方創生研討會暨 44 屆課程與教學論壇, 2021 年 12 月 4 日（オンライン・口頭発表）。

引用参考文献

- 知念渉・尾川満宏・都島梨紗(2023)「コロナ禍の困難から考える質的調査の特質と課題:愛媛県新居浜市での調査を事例に」『社会と調査』30、(印刷中)。
本田由紀(2014)『社会を結びなおす:教育・仕事・家族の連携へ』筑摩書房。
居神浩(2015)『ノンエリートのためのキャリア教育論:適応と抵抗そして承認と参加』法律文化社。
乾彰夫(2010)『〈学校から仕事へ〉の変容と若者たち』青木書店。
生田周二(2021)『子ども・若者支援のパラダイム・デザイン:“第三の領域”と専門性の構築に向けて』かもがわ出版。
石井まこと・宮本みち子・阿部誠(2017)『地方に生きる若者たち:インタビューからみえてくる仕事・結婚・暮らしの未来』旬報社。
小谷敏(2008)『子どもたちは変わったか』世界思想社。
尾川満宏(2021)「人口減少社会におけるキャリア教育の探究:地域課題と学校教育との関係性に着目して」『教育学研究紀要(CD-ROM版)』66、pp. 771-776。
小熊英二(2019)『日本社会のしくみ』講談社。
宇都宮千穂(2004)「新居浜における住友資本の事業展開と都市形成過程」『歴史と経済』46(4)、pp. 1-18。
宇都宮千穂(2008)「新居浜市における社会的分業の展開と都市形成過程」『愛媛経済論集』27(2)、pp. 25-42。
渡部春菜・尾川満宏(2020)「小学校教育での地域連携における『共生』の探究:総合的な学習の時間と特別活動の実践を中心として」『教育学研究紀要(CD-ROM版)』65、pp. 273-279。
新居浜市ホームページ「太鼓台の歴史概説」
https://www.city.niihama.lg.jp/soshiki/kankou/taikoda_irekish.html (2023/2/27 最終閲覧)

謝辞

コロナ禍の困難な状況にもかかわらず、調査に快くご協力いただいた新居浜の皆様へ厚く御礼申し上げます。本研究は第 35 回(2019 年度)マツダ財団研究助成(青少年健全育成関係)を得て実施された。